

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】渡邊拓哉

【所属】(助成決定時)名古屋大学大学院国際言語文化研究科

【研究題目】

1950-60年代米国サイケデリック文化における変性意識状態の合理化に関する研究

【研究の目的】

本研究の課題は、文献資料をもとに、①1950-60年代の米国「サイケデリック文化」が「変性意識状態」(Altered States of Consciousness; 以下、ASC)の体験をどのように実践し、そこにどのような意義を見出し評価したのか明らかにすること、そして②その実践と評価が、ASCの合理化という観点から解釈できるのではないかという仮説を検証することである。「サイケデリック文化」は、本研究においては、1953年を起点とし60年代の後半に最盛期を迎えた、メスカリン・シロシビン・LSDなどの向精神性物質の摂取に積極的な意味を見出し、それを肯定的に捉える文化運動を指す。「変性意識状態」は、通常とは異なる意識の状態を一般化した学術用語で、サイケデリック文化の場合、向精神性物質の摂取によってもたらされる幻覚状態を指す。その体験はサイケデリック体験と呼ばれた。当該文化の主導的立場にいたるのは、作家オルダス・ハクスリーや心理学者ティモシー・リアリーである。

【研究の内容・方法】

まず、上記課題の①に関して、資料(その一部は2011年2月に現地で得たものである)をもとに調査を進めた。当該文化の中心人物たちの言動を、本人の回想録・映像資料なども含め渉猟した。その中には、当時の活字メディア『The Psychedelic Review』誌や『The San Francisco Oracle』紙も含まれる。前者は、ハーバード大を解雇されたリアリーとリチャード・アルパートらが設立した組織の機関誌で、1963年から71年まで発行された。後者は、サイケデリック文化に限らず、ヘイト=アシュベリー界隈のヒッピーたちの諸相を伝えた地下新聞で、66年から68年まで発行された。こうした資料から、当該文化がASC体験をどのように実践し評価していたのかを調査した。

そうして明らかとなるサイケデリック文化のASCに対する姿勢を、合理化という観点から分析しようとするのが、課題の②である。合理化の枠組みとして本研究で援用したのは、社会学者G・リッツアの「マクドナルド化」の概念である。リッツアはマクドナルド化を次の4つの観点から把握する。a) 効率性、b) 計算可能性ないし数量化、c) 予測可能性、d) テクノロジーによるコントロールの4つである(実際には、これらとやや毛色の異なるe) 合理性がもつ不合理性についてもリッツアは論じているが、これについてはここでは考慮しない)。本研究ではこれらの観点から、サイケデリック文化におけるASCの実践・評価を分析した。

また、調査の過程で、サイケデリック文化史をいくつかの段階に分ける必要性を感じ、前期・中期・後期の3段階に分けた。前期は1953年～59年、中期は60年～64年まで、後期は65年～69年とした。それらの段階を分かつ根拠について簡単に記せば、53年=ハクスリーのメスカリン体験(→『知覚の扉』へ)、60年=リアリーの幻覚キノコ体験(→幻覚剤の研究に着手)、65年=ヒッピー文化の台頭・幻覚剤使用の普及である。こう区分することにより、課題の①についても②についても、段階的な流れとして把握することができた。

【結論・考察】

幻覚剤による ASC 体験はサイケデリック文化においてどのような点で価値があるとされたか？ それは、それが普段の私たちが知覚している「現実」を超えた、真の現実に出遭う体験だからだとされる。その体験はしばしば宗教的・神秘主義的体験と重ねられ、その観点から記述された。なぜそれを体験する必要があるのか？ これに答えるには当時の社会文化的な背景を勘案しなければならない。その背景とは、当時の若者たちのあいだで高まっていた反体制の機運である。ASC 体験は、体制側の押しつける意識から脱却するための手段、いわば社会変革のための手段と位置づけられた。その時代のさなかで、サイケデリック文化は ASC 体験をマクドナルド化していったと見なすことができる。通常、価値ある宗教的・神秘的体験を得るには時間がかかったり不確定要素が多かったりする。対して、幻覚剤は、それを効果的に提供するものと見なされ、実際それを裏づけるための実験も為された。